



逃がさない2月に

校長 田邊 雅也

PISA (※) の学力調査で日本は「ほぼ世界一」

12月5日、文部科学省は、2022年に実施されたPISAの学力調査（15歳対象）で、OECD加盟国37カ国の中で、日本の学力が世界トップレベル、「ほぼ世界一」という分析を発表しました。理由として、①新学習指導要領の内容を確実に実施されていること、②コロナ休校が他国に比べ短かったこと、③ICTの利活用に子供も教師も慣れたこと、の3つを挙げています。特に、教科書が変わり、討論や協議などが取り入れられ、子供が積極的に問題解決する教育活動が多くなったことが、よい影響を与えているようです。しかし、全国的な課題として、まだまだ教師主体の知識獲得型の授業が多く、子供が「学ばされている」という実態があります。

自ら学ぶ意識は34位

ある教育論文では、このPISAの結果を受け、自分から学び、協働しながら、問題解決をしていくような教育活動が、今後、増えていくと予想しています。このことにより、毎年4月に6年生に実施される全国学力・学習状況調査の結果が、向上していきだろう、とも記しています。しかし、PISAの質問の中に、「再び休校した場合、言われなくても学校の勉強にじっくり取り組みますか。」という質問に対して、「自信がない。」と回答した子供の割合が高い結果となりました。OECD加盟国37か国中、日本は34位でした。確かに、これは大きな問題だと思えます。

六小では保護者・地域の理解が広がる

PISA調査は、全国から抽出された学校の15歳の生徒が対象なので、六小の子供たちの結果ではありません。しかし、国力の基盤である教育分野が、「ほぼ世界一」という成果を上げているのは、教育関係者として、喜ばしい結果です。本校も、この3年間で教育改革が進み、子供たちの学びが大きく変容しました。今年度は、保護者・地域から多大なご協力をいただき、オーセンティック（本物）でウェルビーイング（誰かのため、何かのため）に、問題解決をしていく教育活動が増えました。先日の保護者アンケート（学校評価）でも、子供たちの自律的な学びへの理解と、保護者・地域と連携した教育活動への理解を示している割合が、昨年度よりも増えています。皆様のご理解とご協力のおかげで、充実した教育活動となってきています。

卒業発表会に向けて

6年生の卒業発表会（2月15日）は、私の大好きな教育活動のひとつです。「このアイデアはこうしよう。」「これは、私がまとめてくる。」「この部分は、私に任せて。」など、自分たちがやりたいことに対して、自分たちのやり方で真剣に問題解決をしています。小学校生活最後の授業参観なので、「自分たちの今の思いをお家の方に見せたい。」「小学校生活最後の授業参観を充実したものにしたい。」という切実な思いがあります。しかし、教師は、子供たちが支援を求めたときだけ最低限の手助けをしますが、子供たちの力で進めなくてはなりません。本番までの紆余曲折や試行錯誤こそが、一番の学びです。子供たちは、友達と協力しながら、目の前の切実な問題に向き合っていくのです。これこそ本物の学びだと感じます。

「自分で、自分から」の気持ちを逃がさない2月に

「1月は行く、2月は逃げる、3月は去る」と言われます。1月は年始の休みがあり、あっという間に過ぎ去ってしまったような感覚があります。今年の2月は閏年ですが、他の月よりも日数が少ない上に、2度の3連休もあり、気を抜いていると、逃げるように去っていくような感覚になるでしょう。いつも子供たちに話していますが、「自分で、自分から」学び、「誰かのため、何かのため」という問題解決をしていく教育が、未来を切り拓く人材を育成する教育だと思っています。逃げるように過ぎる2月ですが、次年度に向け、「自分で、自分から」という気持ちを逃がさない2月となり、令和6年度につなげられるようお願いいたします。

※PISA (Programme for International Student Assessmentの略)

OECDが進めている国際的な学習到達度に関する調査。15歳児を対象に、読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について、3年ごとに実施されている。

※文部科学省の分析 (令和5年12月5日 QRコード 右)

https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

